

福岡空港整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

# 雀居 10

—雀居遺跡第14次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1281集

2016

福岡市教育委員会

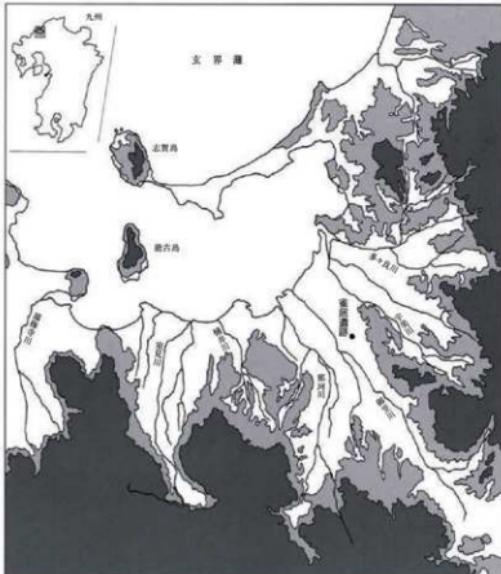


福岡市博多区

# 雀居 10

— 雀居遺跡第14次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1281集



遺跡略号 SAS-14  
調査番号 1443

平成28年  
福岡市教育委員会



# 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市の責務であります。

しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあります。そのため、福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は、福岡空港整備事業に伴い発掘調査を実施した雀居遺跡第14次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、古代～中世以降の水田跡や弥生時代の集落跡を確認することができました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表します。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

## 例 言

1. 本報告書は博多区の福岡空港整備事業に伴い、2015年1月19日から同年3月20日にかけて、福岡市博多区大字雀居（福岡空港内）にて実施した雀居遺跡第14次調査の報告書である。
2. 調査は細石朋希が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、細石が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、細石・米倉法子が行った。
5. 本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影は、細石が行った。
6. 本書に掲載した挿図の作成は、細石が行った。
7. 本書に記載する記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
8. 本書の執筆及び編集は、Iを井上蘭子が執筆し、それ以外を細石が行った。
9. 本書で用いた方位は座標北である。

遺跡名	雀居遺跡	調査次数	14次	所在地	博多区大字雀居
調査番号	1443	遺跡略号	SAS-14	遺跡番号	2633
調査面積	575m <sup>2</sup>	調査期間			2015.1.19～3.20

# 本文目次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	2
II. 遺跡の立地と環境.....	3
III. 調査の記録.....	7
1. 概要と層序.....	7
2. 第1面の調査.....	7
3. 包含層の調査.....	8
4. 第2面の調査.....	12
IV. おわりに.....	22

# 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	4
第2図 福岡空港と雀居遺跡調査地点 (1/15,000) .....	5
第3図 第14次調査区位置図 (1/2,000) .....	6
第4図 基本層序 (1/40) .....	7
第5図 第1面全体図 (1/200) .....	7
第6図 第1面出土遺物実測図 (1/2) .....	7
第7図 包含層出土遺物実測図1 (1/3) .....	9
第8図 包含層出土遺物実測図2 (1/3) .....	10
第9図 包含層出土遺物実測図3 (1/3) .....	11
第10図 第2面全体図 (1/200) .....	12
第11図 SD006出土遺物実測図 (1/3) .....	13
第12図 SD046実測図 (1/40) .....	13
第13図 各土坑実測図 (1/40) .....	14
第14図 SK047及び出土遺物実測図 (1/20, 1/3) .....	15
第15図 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....	15
第16図 SW001実測図 (1/100) .....	16
第17図 SW001出土遺物実測図1 (1/3) .....	17
第18図 SW001出土遺物実測図2 (1/3) .....	18
第19図 SW001出土遺物実測図3 (1/2) .....	19
第20図 SP018及び出土遺物実測図 (1/20, 1/3) .....	20
第21図 ピット出土遺物実測図 (1/3) .....	21

# 図版目次

写真1 第14次調査区周辺状況 (北西から) .....	23
写真2 第14次調査区周辺状況 (北から) .....	23
写真3 第14次調査区周辺状況 (北東から) .....	23
写真4 第14次調査区周辺状況 (東から) .....	23
写真5 第14次調査区周辺状況 (南東から) .....	23
写真6 第14次調査区周辺状況 (南から) .....	23
写真7 第14次調査区周辺状況 (南西から) .....	23
写真8 発掘作業風景 (東から) .....	23
写真9 第14次調査区基本層序 (北西から) .....	24
写真10 第1面全景 (西から) .....	24
写真11 畦畔土層断面 (南東から) .....	24
写真12 畦畔と足跡 (東から) .....	24
写真13 杭1 (北東から) .....	24
写真14 杭2・3 (北東から) .....	24
写真15 第2面全景 (南西から) .....	25
写真16 第2面南西部 (西から) .....	25
写真17 SD046・SK045・047完掘状況 (南から) .....	26
写真18 SK015完掘状況 (南から) .....	26
写真19 SK016完掘状況 (南から) .....	26
写真20 SK047 (北から) .....	26
写真21 SK047土器出土状況 (北から) .....	26
写真22 SW001 (西から) .....	27
写真23 SW001土層断面 (北西から) .....	27
写真24 桂根が残るピット (東から) .....	27
写真25 SP018土器出土状況 (南から) .....	27

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡空港は、羽田空港・成田空港に次ぐ多くの航空機が発着する航空ネットワークの拠点であり、アジアのゲートウェイとして九州・福岡における空の玄関口としての役割を大きく担っている。福岡空港はまた、都心部に隣接し、公共交通機関にも近接しているという立地条件の上で、世界でもトップクラスのアクセスの良さを誇っている。そのため空港利用者は福岡都市圏のみならず広く九州や西日本地域に及び、滑走路一本の空港としては日本で一番混雑している空港となっている。

その歴史は、昭和19年に旧陸軍が民有地を接收して席田飛行場として建設したのが始まりである。当初は面積2,215,000m<sup>2</sup>、600m滑走路一本の飛行場であったが、終戦後は引き続き米軍が接收し、米軍基地である板付飛行場として長く使用された。昭和26年には、国内線が開設され民間飛行場として供用開始されるようになり、昭和44年に第1ターミナルビルの開業、昭和47年には全面返還され、国が設置・管理する第二種空港として告示され現在に至っている。その間、第2・第3ターミナルビルの建設、地下鉄空港線の乗り入れ、新国際線旅客ターミナルビルの供用開始を経て福岡空港は大きく発展を遂げてきた。

このような空港施設、機能の充実のための整備事業に合わせて、これまでに福岡市教育委員会では当局との協議を重ね、地下に包蔵されている埋蔵文化財がやむなく破壊される場合において行われる記録保存のための発掘調査を実施してきた。

まず、平成2年度に、運輸省第四港湾建設局（当時）が進める第6次空港整備事業の一環としての空港西側における整備計画が明らかとなった。第四港湾建設局と福岡市教育委員会との間で協議を重ね、試掘調査を行い、その結果、これまで遺跡の空白地帯であった福岡空港内に雀居遺跡という埋蔵文化財が存在することが確認された。この後、この事業に関連する一連の整備計画に伴い、平成3年度から平成10年度まで継続して発掘調査を行い、弥生時代から中世にいたる集落、水田遺跡などが発見され、多大な成果を上げることができた（雀居遺跡第1次～第13次調査）。この調査が福岡空港内における初めての本格的な発掘調査となる。

この整備事業で新国際線ターミナルビルが開設され、航空機の発着回数がさらなる増加を続けたことに伴い、新たな整備計画が立てられた。平成19年度に申請が提出された、空港東側におけるナイトステイエプロン（夜間駐機場）の建設計画である。これについて、九州地方整備局と福岡市教育委員会は協議を行い、計画範囲で確認された埋蔵文化財について、平成20年度から平成22年度まで3年間記録保存のための発掘調査を行った（久保園遺跡第4次調査）。これまで丘陵西麓端までと認識されていた久保園遺跡がさらに西側に広がることが判明し、弥生時代から古墳時代にかけての集落、古墳時代から古代にかけての水田や水利遺構が発見された。

一方で、福岡空港における滑走路処理容量の限界に近い運営、近隣住宅地への騒音、安全性などの課題を検討するため、平成15年度から平成20年度にかけて、国（九州地方整備局、大阪航空局）と地域（福岡県、福岡市）が連携し、市民等からの意見を収集するパブリック・インボルブメントの手法を取り入れた「福岡空港の総合的な調査」を実施した。その結果、「現空港における滑走路増設」もしくは「新空港」による抜本的な方策が必要であるとの方向性が示された。これらを踏まえ現空港における滑走路増設について、国、福岡県、福岡市による「福岡空港構想・施設計画検討協議会」を平成21年5月に設置し、平成24年3月に滑走路増設案を取りまとめた。平成24年度から平行誘導路二重化

事業の一環として、環境アセスメント手続きが行われ、平成27年11月に終了している段階である。

この滑走路増設計画について、九州地方整備局と福岡市教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。平成21年7月17日付で空港整備事業について九州地方整備局から最初の申請が提出され、それを受け平成22年度から26年度にかけて継続的に計画範囲における試掘調査を行った。その結果、遺跡の存在が確認された範囲については発掘調査が必要との回答を行い、引き続き空港整備工程とのり合わせを行なながら発掘調査の方法、着手時期などの協議を進めた。なお、平成26年度の発掘調査については、平成26年6月23日付、事前審査番号26-1-80の申請に係るものである。

こうして空港整備工事計画に伴う埋蔵文化財発掘調査の工程が立てられ、福岡空港滑走路増設工事に伴う本格的な発掘調査は平成27年度以降に行われることとなったが、それに先立ち、滑走路増設に伴って移設される第2ASR（第二管制塔）の建設予定範囲の一部について発掘調査を行うことになった。この地点は平成9年度に行われた雀居遺跡第12次調査地点に隣接する範囲であり、その調査では、弥生時代の集落、古代～中世にかけての水田跡、それに伴う多量の木製品などの多くの成果が上げられている。

発掘調査は平成27年1月19日から平成27年3月20日まで行った。

## 2. 調査の組織

### 調査委託

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成26年度・資料整理：平成27年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財審査課 課長 米倉 秀紀（26・27年度）

同課事前審査係長 佐藤 一郎（26・27年度）

空港協議等担当主査 井上 薫子（26年度）

文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄（26・27年度）

同課調査第1係長 吉武 学（26・27年度）

庶務：文化財部埋蔵文化財審査課 管理係長 内山 広司（26年度）

大塚 紀宜（27年度）

同管理係 横田 忍（26・27年度）

事前審査：事前審査係長 佐藤 一郎（26・27年度）

事前審査係 福菌美由紀（26・27年度）

空港協議等担当主査 井上 薫子（26年度）

空港協議等担当 松尾奈緒子（26年度）

調査担当：文化財部埋蔵文化財審査課空港協議等担当主査 井上 薫子（26年度）

同埋蔵文化財調査課 調査第2係 細石 朋希（26年度・27年度）

発掘作業：山田ヤス子 高橋 茂子 菊池 正喜 安井 廣 岩永いさ子 河原 明子

平江 裕子 石井 清子 脇田 誠二 定直 康浩 岩佐 克行 節政 善恵

山口 敦 副島 勝人

整理補助：田尻 直子

整理作業：萩本 恵子

なお文化財部は、組織改編の為平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

## II. 遺跡の立地と環境

福岡市は北に玄海灘を臨み、背振・三郡山系を背にひかえる。市内には、これらから派生する丘陵によって画された柏屋平野・福岡平野・早良平野・今宿平野といった中小の平野が展開し、いずれも古くから独自の歴史的・地理的環境を有している。

今回調査を行った雀居遺跡の位置する福岡平野は、西を背振山系に属する油山（標高597m）から北側に延びる丘陵によって早良平野と分かれる。一方、東には三郡山地より派生する大城山（標高410m）の山麓から北西に、柏屋平野との境となる月隈丘陵が延びている。また、福岡平野の中央部には御笠川・那珂川が北の博多湾へと流れ込み沖積地が形成されており、沖積段丘が南北に連なっている。そして、沿岸部には海岸砂丘が発達する。

雀居遺跡は、前述の御笠川の東岸側、標高5m前後を図る沖積地に位置する。現福岡空港内の敷地内にあり、空港周辺の環境は、以前は諸岡丘陵と月隈丘陵に挟まれた低湿地の水田地帯であったが、現在ではそのほとんどが宅地化されている。

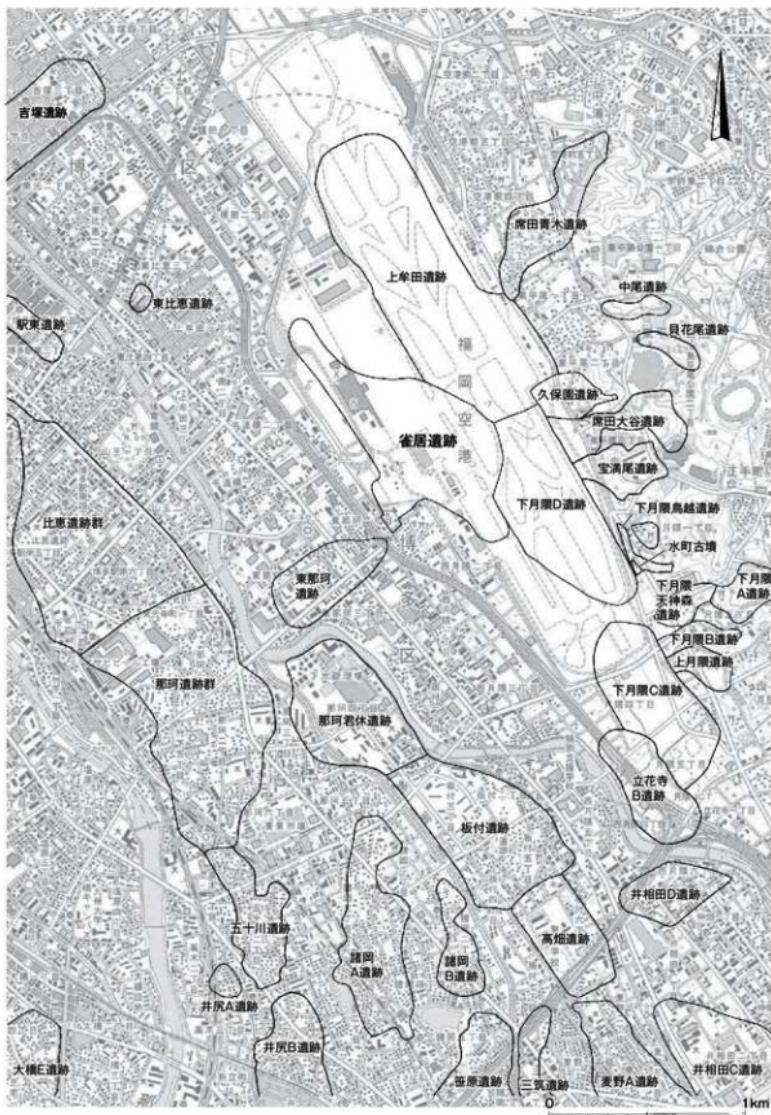
比恵台地から月隈丘陵に隣まれた地帯には多くの遺跡が立地している（第1図）。月隈丘陵は福岡空港の東側に位置する低丘陵で、派生する多数の支丘上をみると、弥生時代には集落（席田大谷遺跡・久保園遺跡）や、墓地（席田青木遺跡・宝満尾遺跡・上月隈遺跡）が営まれていたことが、これまでの調査で分かっている。一方、平野部では雀居遺跡や下月隈C遺跡などの沖積地での調査により、弥生時代早期の微高地上の集落跡や、古代～中世の水田跡が確認されている。

御笠川を越え、その西側にもまた大規模な遺跡が数多く展開しており、弥生時代の初期水田跡と環濠で知られる板付遺跡などが知られる。そのさらに西の諸岡丘陵では、無文土器等も出土し大陸との交流が色濃く現れている。また那珂・比恵遺跡群においては宅地化が進み旧地形を残す地点は少なく、全体を理解するには困難な点が多いが、弥生時代から古墳時代に至る良好な遺跡が豊富に存在する。

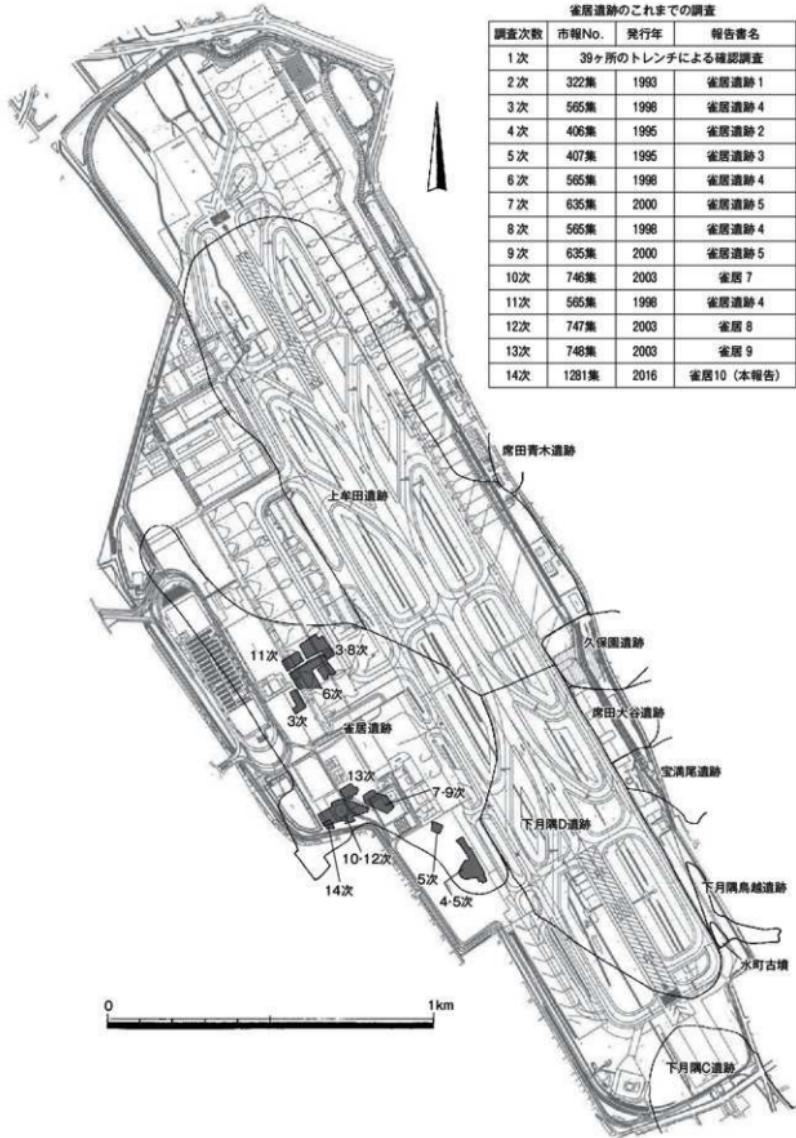
そういった周辺環境の中で、雀居遺跡第14次調査区は福岡空港敷地内における国際線ターミナル側の南西端に位置している（第2図・写真1～7）。第12次調査区の南側で、調査範囲の北西側2/3程が第12次調査時の下層未調査部分となる。調査区の西側には調整池、南側に空港内を廻る水路を臨む。近辺は大部分が米軍施設の跡地であり、平坦地となっているが、明治時代の地図によると水田の中に微高地が数箇所あり、そこに幾つかの集落が展開していたようである。また、戦時中に空港工事に携わった人々によれば工事中に甕棺や土器が出土したことである。

第12次調査においては、古代から中世に属する水田面が検出され、多数の畦畔や足跡が確認されている。また墨書き土器や木製の人形や曲げ物が出土した。さらに弥生時代後期～古墳時代前期、縄文時代晩期末～弥生時代中期前半の遺構・遺物が出土しているが、本調査区周辺の南側地点においては遺構の密度が非常に薄く、自然に形成されたと考えられる窪地から土器や木製の農具等が出土するに留まっている。

雀居遺跡においては、空港西側の整備に伴う平成3年6月15日～8月3日の遺跡確認調査（第1次調査）までその存在が知られていなかった。この調査では、39ヶ所のトレーンにより、弥生時代から中世に至る遺構・遺物を確認した。この結果を受けて、第2次調査では同年10月18日～12月28日にかけて2面の調査を行い、古代後期から末の集落跡・水田跡を確認した（以下、調査区位置は第2図参照のこと）。第3次調査では第2次調査区の西側・北側2ヶ所の調査を行った。平成4年8月3日～平成5年3月22日までの期間で、河川跡や前回と同様の集落跡、その下の洪水砂下から水田跡を確認

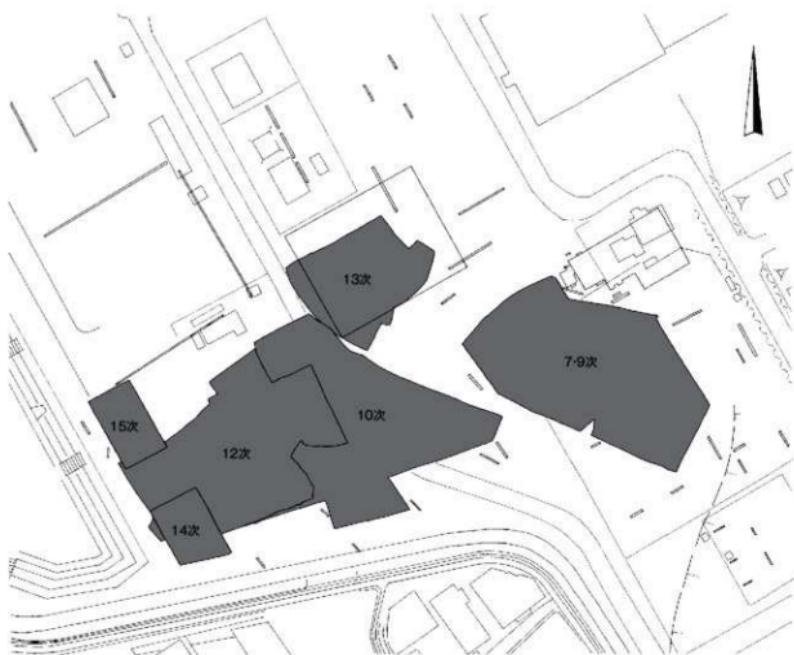


第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 福岡空港と雀居遺跡調査地点 (1/15,000)

した。平成4年10月19日～平成5年3月31日に行った第4次調査の位置は、これまでの調査区から大きく南東に離れる。第5次調査は第4次調査の拡張で、平成5年6月15日～12月15日の期間で実施している。第4・5次調査では微高地上に営まれた縄文時代晩期から古墳時代前半に至る大規模な集落跡を確認できた。第6次調査は第2・3次調査区の近辺で実施した。平成5年6月15日～平成6年2月28日にかけて調査を行い、厚い洪水砂に覆われた、長方形区画を基本とする古代末の水田跡を確認した。第7・9次調査区は同一の区画で、第7次調査の2面及びその北西側の調査を第9次調査としている。第7次調査は平成6年8月1日～12月26日、第9次調査は平成7年5月8日～平成8年3月25日の期間で実施した。この調査区では、縄文晩期から古墳前期にかけての微高地上の集落跡とその周間に投棄された土器群が確認された。また微高地上縁辺部の弥生前・中期の墓群からは人骨が出土している。第8次調査は第3次調査区の北西部で平成6年11月7日～平成7年3月20日まで行われた。古代末の集落跡・下面の水田跡が確認できた。近接する第10・12・13次調査区ではそれぞれ平成8年5月13日～平成9年1月31日、平成9年5月8日～平成10年3月25日、平成10年4月15日～12月25日の期間で調査が行われ、古代～中世の水田面と弥生時代早期～古墳時代前期の集落跡が確認された。第11次調査は平成8年11月1日～平成9年11月30日に実施され、古代末の水田跡を確認している。



第3図 第14次調査区位置図 (1/2,000)

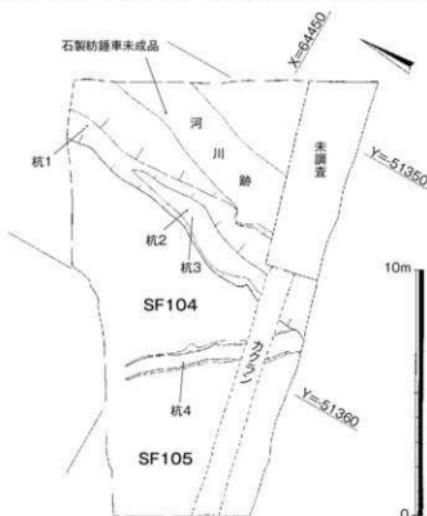
### III. 調査の記録

#### 1. 概要と層序

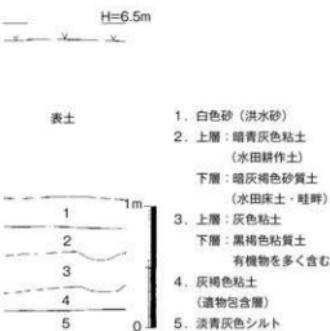
第14次調査区の範囲は、水田面から下が未調査であった第12次調査区南西側の一部を含む。現地表面は東側で最も高く標高6.4mを測り、西側で最も低く標高6.2mを測る。基本層序は第12次調査区との境界部で実測した(第4図、写真9)。1は白色の洪  
水砂で、2の水田面上に厚く堆積する。2は上層数cmのみ暗青灰色粘土の水田耕作土で、下層は暗灰褐色砂質土の床土である。畦畔部は下層の土で形成される。3は上層が灰色粘土、下層が有機物を多く含む黒褐色粘質土である。どちらも遺物をほとんど含まない。4は灰褐色粘土で弥生時代の遺物包含層である。5は淡青灰色シルト(一部粘土)で本調査の最下面とした。この下には砂層が広がる。

#### 2. 第1面の調査

現地表面から約130cm下で検出した水田面を第1遺構面とした(第5図、写真10)。標高4.9~5mを測り、調査区中央に南東~北西方向の畦畔1条を確認した。これは第12次調査区の第1面(古代~中世)で確認された畦畔の延長で、東側が水田SF104、西側が水田SF105である。中央で杭を1本確認したが水田に伴うものかは不明である。遺物は出土していない。

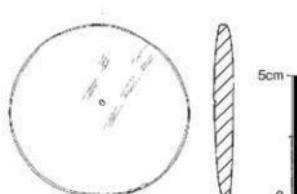


第5図 第1面全体図 (1/200)



第4図 基本層序 (1/40)

また東側には水田面を切る南北方向の河川跡が存在し、白色砂が堆積していた。東岸は確認できなかったが幅は8mを超え、残存する深さは約50cmである。西岸に並行して3本の杭が確認できた(写真13~14)。護岸用のものか。川底からは石製防錐車の



第6図 第1面出土遺物実測図 (1/2)

未成品が1点出土した（第6図）。径7.3cm、厚さ8mmで中央に穿孔痕がある。

### 3. 包含層の調査

現地表面から約2m下、標高約4.1m～4.3mにかけて調査区全体に厚さ約20cmの灰褐色粘土の水平堆積がみられる。粘土中には弥生前期～中期前半の土器片及び黒曜石を多く含んでおり、これを遺物包含層として人力で掘削し遺物を取り上げた。

遺物は集中的な分布などは見られず、破片として全域から同程度の量が出土している。なお全て器面が激しく磨耗しており、遺存状態が悪い。これらのことと鑑みると、灰褐色粘土の水成堆積に伴う二次堆積遺物で、原位置を保っているものではないと考えられる。

出土遺物（第7～9図）

出土した土器は前述のとおり器面が激しく磨耗している。土中から採取する際、粘土に表面が貼りついて器面が剥離してしまったものが多く、調整の痕跡が確認できるものは少なかった。全体的に弥生時代前期～中期前半に位置づけられるものがほとんどであるが、一部弥生時代後期の土器や須恵器片、高台付きの土師椀などが混じる。

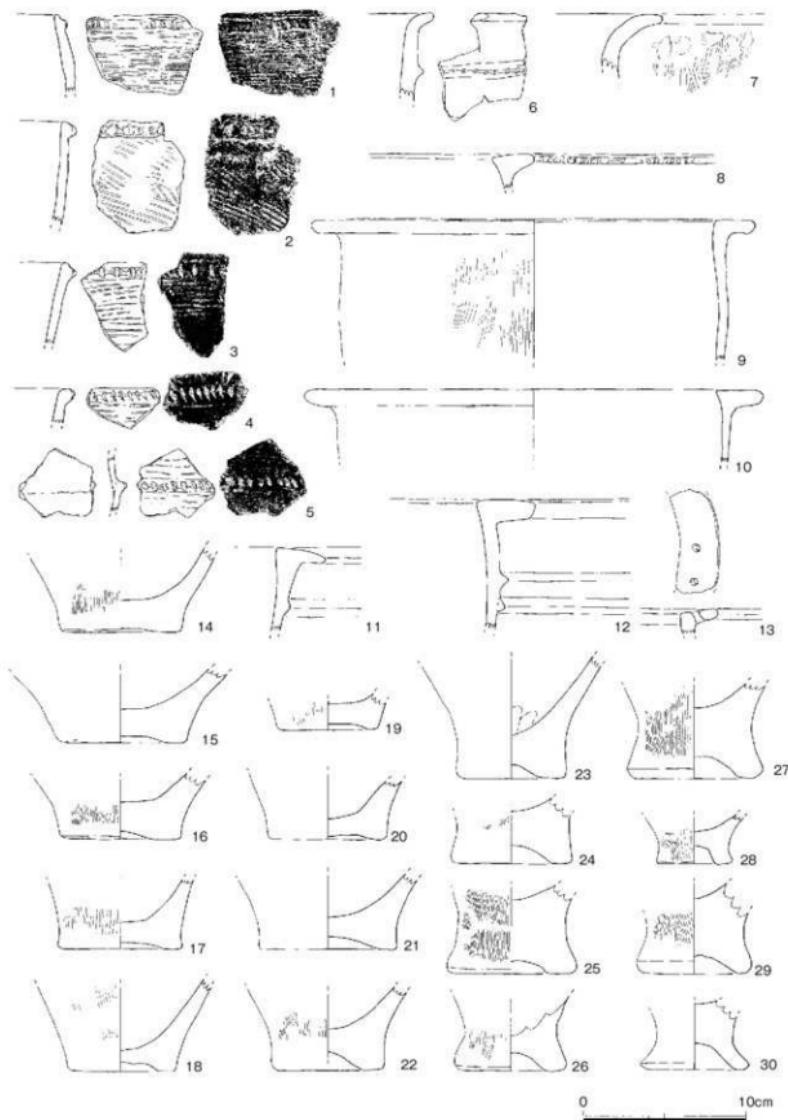
1～13は壺の口縁部片である。1～4は口縁部端に刻目突帯をもち、外面に条痕が看取できる。内面にはナデを施す。5は壺の胴部片で、刻目突帯を廻らしている。外面には条痕が施されている。6は口縁部下に刻目を施した突帯を廻らす。8は弥生時代中期初頭の壺で、口縁部端に刻目をもつ。9は復元した口径27cm。10は復元した口径28cmである。11は口縁部下に断面三角形の突帯を廻らせていく。12は口縁部下に同様の突帯を2条廻らせる。13は口縁部に2箇所穿孔を施している。下側の穿孔部周辺に胎土の盛り上がりが看取でき、焼成前に穿孔されたものと考えられる。14～30は弥生時代前期末～中期前半の壺の底部。全て上げ底のもので、内面にナデを施し、外面に継刷毛を施している。やや時期の古い底部が外側に開いており底の高いものと、時期の下る底部が窄まり底の低いもの、そしてその中間形態の3種類が確認できる。底径は4.6～8.4cmに収まる。

31～36は壺の口縁部片である。31～33は外面の頭部との境に段を有し外反する弥生時代前期中頃のもので、32は口縁部外面に刷毛目が看取される。33は復元した口径18cm。34・35は口縁部内面に段を有する弥生時代前期末のもので35は外面に一定の間隔で縦縞の文様がみられる。34は復元した口径28cm。36はさらに時期が下り口縁内部の段が発達してせり出す弥生時代中期初頭のものである。37・38は壺の肩部片である。37の外面は頭部との境に段がわずかに残り、全体に横方向の丁寧なミガキが看取される。38は細い突帯下に無軸の羽状文を刻むもので、器面は胎土が粗い。39～43は壺の底部片である。39は復元した底径6.4cm。40は復元した底径14.2cm。41～43は製作時に敷いた木の葉の葉脈痕が底面に看取される。それぞれ復元できた底径は6cm・8.2cm・8cmである。

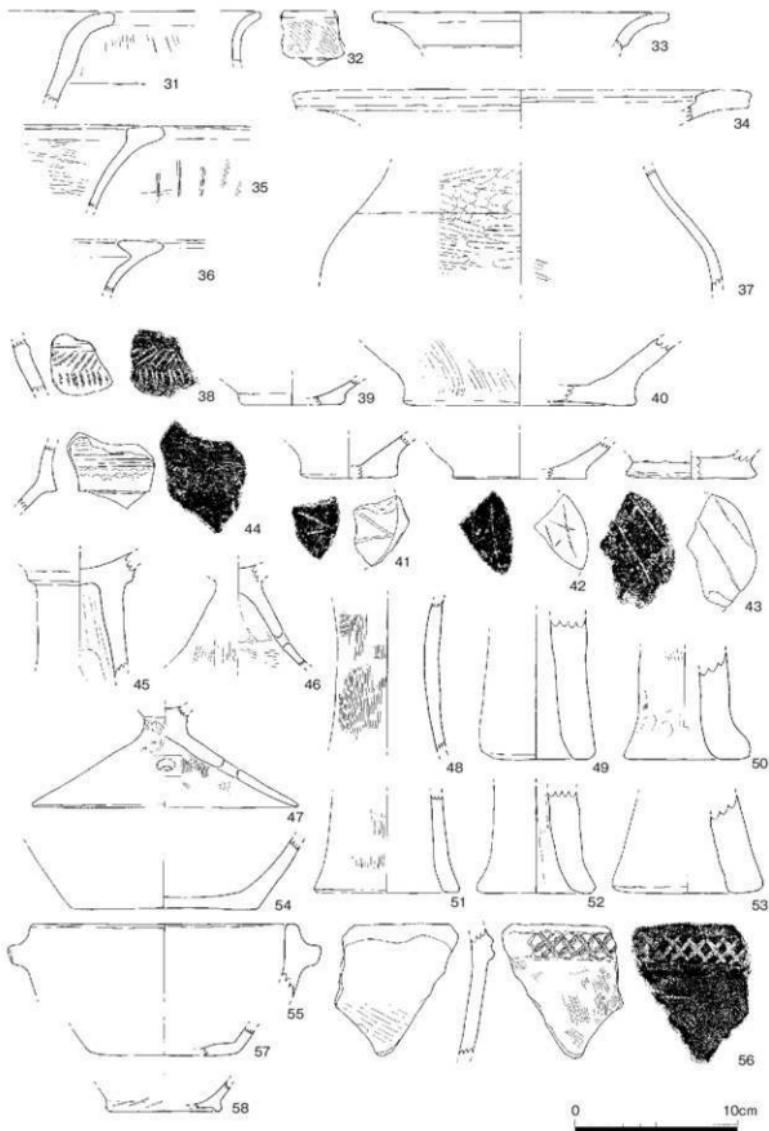
44は土師器である。複合口縁壺の口縁部片で、端部は欠損している。器面の磨耗が激しいが、外面に横方向の沈線と山形文がみられる。

45～47は高坏の頭部から脚部にかけての破片である。45は頭部外面に段を有する。46・47は脚部が外側に大きく広がり、また焼成前に穿孔が施されている。46は残存率が悪く1ヶ所の穿孔部のみ看取できた。外面に刷毛目を有する。47の穿孔部は同じ高さに3ヶ所確認でき、位置関係から四方4ヶ所に穿孔されていたものとみられる。内外面に刷毛目、頭部外面に継方向のミガキが施されており、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。復元した底径16.2cm。

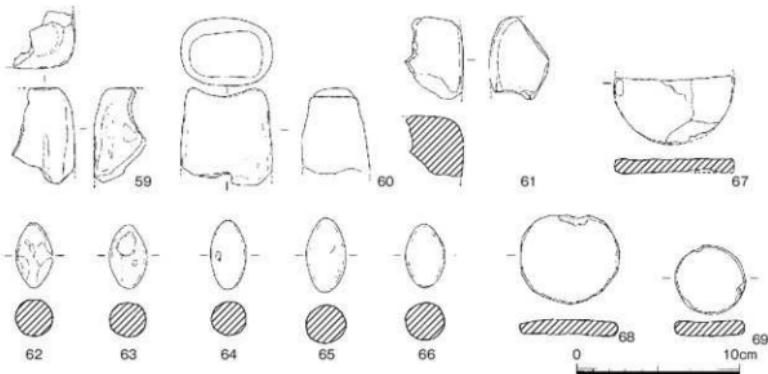
48～53は筒形の土製支脚である。48・51は最も厚い部分で9～12mmと器壁が薄く、外面に丁寧な継刷毛が施されている。一方で49・50・52・53は厚さ1.8～2.2mmと器壁が厚く、外面にはユビオサエが



第7図 包含層出土遺物実測図1 (1/3)



第8図 包含層出土遺物実測図2 (1/3)



第9図 包含層出土遺物実測図3 (1/3)

看取されるものもあり、内外面ともにやや調整が粗く、凹凸が目立つ。底径は49が7cm、50が7.7cm、51が8.9cm、52が復元して7.2cm、53が復元して9.2cmである。

54は甕あるいは壺の底部か。器面が荒れて調整痕は看取できなかった。底径11.3cm。

55は把手付きの鉢の口縁部か。調整は看取できなかった。復元した口径は16.3cm。

56は甕の胴部片である。幅1.6cmの幅広で断面台形の突きを外面に廻らし、櫛状の工具にて斜格子文を深く刻む。外面に縱刷毛を施している。

57は唯一出土した須恵器である。壺の底部片で、内外面に回転ナデの痕跡が看取される。

58は断面半円形の高台をもつ土師質の椀の底部片である。外面の高台との境に斜め方向の沈線がみられる。

59~61は土製支脚の破片か。59・60は上端部の破片と考えられ、上部は窪んでいる。60は最大幅5.5cm、最大厚4.2cmを測る。

62~66は土製投弾である。ラグビーボールのような規格的な形状をもつ。62は長さ4cm、最大径2.3cm。63は長さ3.9cm、最大径2.2cm。64は長さ4.3cm、最大径2.1cm。65は長さ4.6cm、最大径2.5cm。66は長さ3.9cm、最大径2.5cmを測る。

67~69は円盤状土製品である。67は径7.3cm、最大厚1cm。68は最大径6cm、最大厚0.9cm。69は最大径4.3cm、最大厚0.9cmを測る。

他、黒曜石の小石核・剥片や黒曜石製の石鏃3点、層灰岩製の扁平片刃石斧3点、滑石製紡錘車3点に小原石1点、6cm大の安山岩の石核1点・安山岩7.5cm程の縦長剥片1点が出土した。

#### 4. 第2面の調査

現地表面から約2.2m下、標高約4.15mの高さに水平に広がる淡青灰色シルト層上面にて、溝や土坑、ピットを確認した。これを第2遺構面として調査を行った（第10図、写真15）。

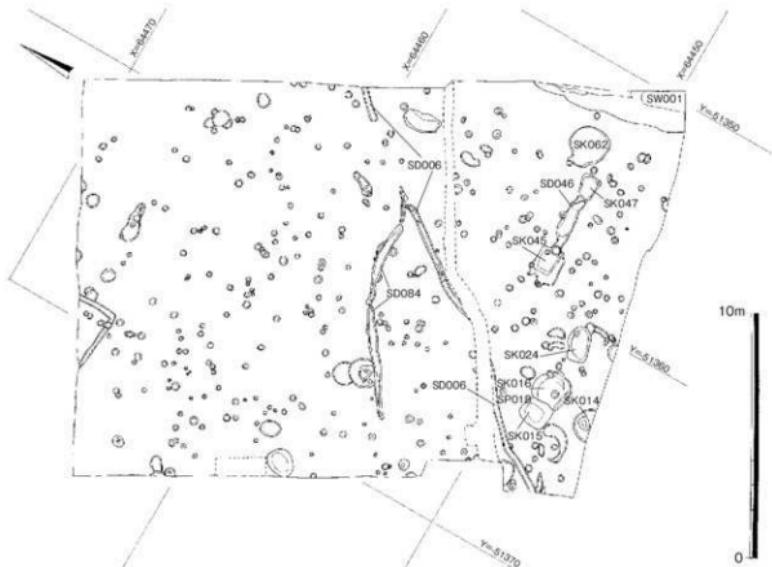
調査区西隅は淡青灰色シルトの下の細砂層が露出しており、反対側の東隅では地形が落ち込んで天然の窪地SW001を形成している。よって直上の遺物包含層が形成される前の原地形は西高東低の高差をもつものであったと考えられる。

##### 1) 溝

SD006（第10図、写真16）調査区中央部に位置する。調査区を南西から北東方向に横断する溝である。最大幅27cm、深さ8cmを測る。非常に浅く、北側は部分的に途切れている。出土遺物（第11図）は、1～5は全て弥生土器で、甕の口縁部の小片である。弥生時代前期末から中期前半にかけての時代のもので、1は口縁部端に細く刻目を施している。

SD046（第12図、写真16・17）調査区南東部に位置する、東西方向に延びる短く浅い溝である。両端を土坑SK045・SK047に切られてしまい、残存する長さは2.4mで、最大幅0.58m、深さ11cmを測る。遺物は図化し得るものがないが、赤色顔料を塗布した土器片が1点出土している。

SD084（第10図、写真16）調査区中央部に位置する。西南西から東北東へ延びる溝である。最大幅40cm、深さ8cmを測る。遺物は図化し得るものはないが、弥生時代中期初頭の甕の口縁部小片などが出土した。また、3cm以下の黒曜石の小剣片・チップがわずかに出土している。



第10図 第2面全体図 (1/200)



第11図 SD006出土遺物実測図 (1/3)

## 2) 土坑

SK014 (第13図、写真18) 調査区南部に位置する円形の土坑で、南東側半分は埋設管下に延びていたため未掘である。中央が窪み二重になっている。堀方は径1.38mで、深さはテラス部で14cm、最深部で26cmを測る。出土遺物（第15図1～4）は、壺の小片で、1・2は口縁に刻目突帯をもつ。2は外面に条痕が看取できる。

SK015 (第13図、写真18) 調査区南部に位置する隅丸方形の土坑。長軸1.23m、短軸1.05mで、深さは43cm。SK016を切る。埋土は上層が灰褐色シルト、下層が青灰色シルトで、上層・下層共に互いの土が小プロック状に混じる。遺物（第15図5・6）は、どちらも壺の口縁で、刻目突帯と外面に条痕を施す。黒曜石の小剝片が3点出土した。

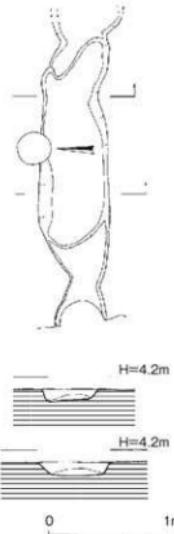
SK016 (第13図、写真19) 調査区調査区南部に位置する円形に近い形状の土坑。西側をSK15に切られる。中央にピット状の窪みをもち、堀方は径約1.5～1.6mで、深さは最深部で39cm。北半部は掘り過ぎてしまったが、埋土は上層が暗褐色粘質土で黄灰色シルト・灰色粘質土の小プロックを含み、下層が青灰色シルトで上層の土の小プロックを含む。またピット状の窪みには暗褐色粘質土と青灰色シルトがラミナ状に堆積する。遺物（第15図7）は、壺の口縁で、刻目突帯と外面条痕を施す。また黒曜石の小石核1点・剝片3点が出土した。

SK024 (第13図) 調査区南部の不整形の土坑。長軸1.48m、短軸0.9mで、深さ38cm。埋土は上層が灰褐色粘質土で暗褐色粘質土を含み、中層は暗褐色粘質土や青灰色シルトで互いの土を含む。下層は青灰色シルトで黄褐色砂質土を含む。弥生土器の小片・黒曜石の小剝片2点が出土した。

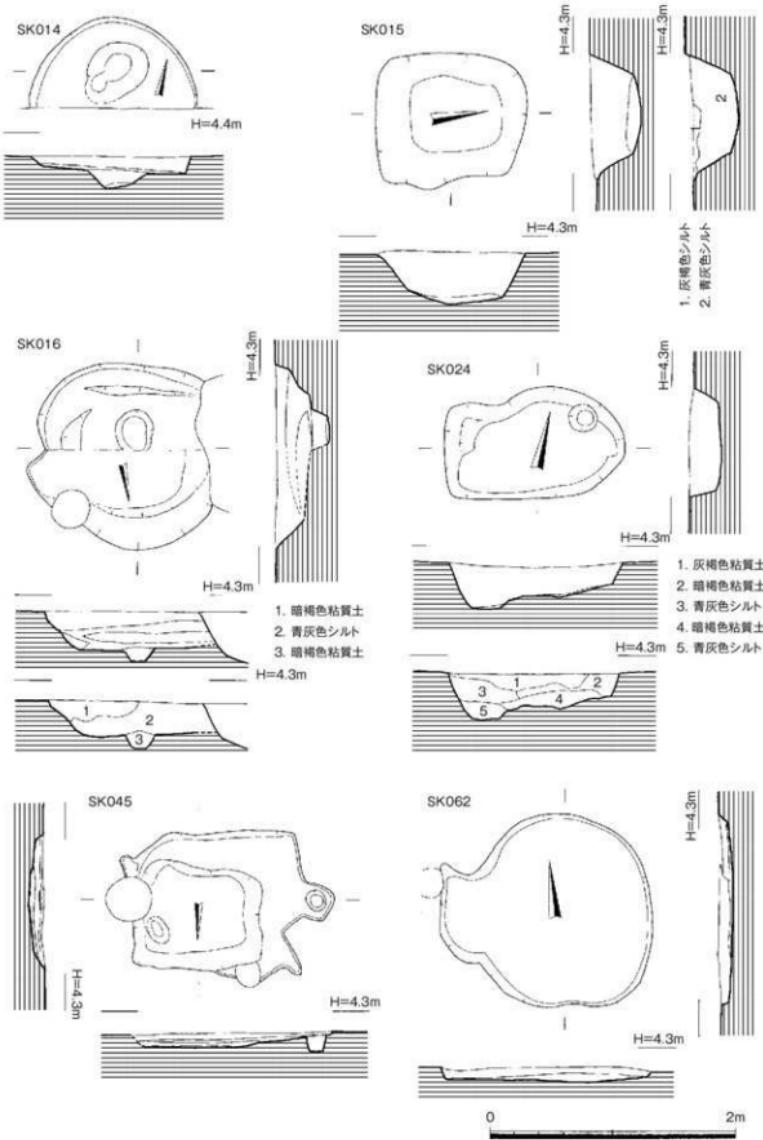
SK045 (第13図、写真17) 調査区南東部に位置する不定形の土坑。内部にテラス部をもち、浅く2段になる。堀方は長軸1.65m短軸1.28m、深さ12cmで、SD046を切る。遺物（第15図8～10）は、8が刻目突帯と外面に条痕をもつ壺の口縁で、9・10が壺の底部。また黒曜石の剝片1点が出土した。

SK047 (第14図、写真20・21) 調査区東部に位置する隅丸台形の土坑である。堀方は長軸が2m、短軸が最大で1.66mを測り、深さは27mで、SD046を切る。土坑内南際からほぼ1個体分に相当する壺の破片がまとめて出土した。出土した壺は、口縁部に刻目突帯を有し、底がわずかに窪む。調整は、外面に右下から左上への条痕が、内面にヨコナデが看取できる。また黒曜石の剝片1点が出土した。

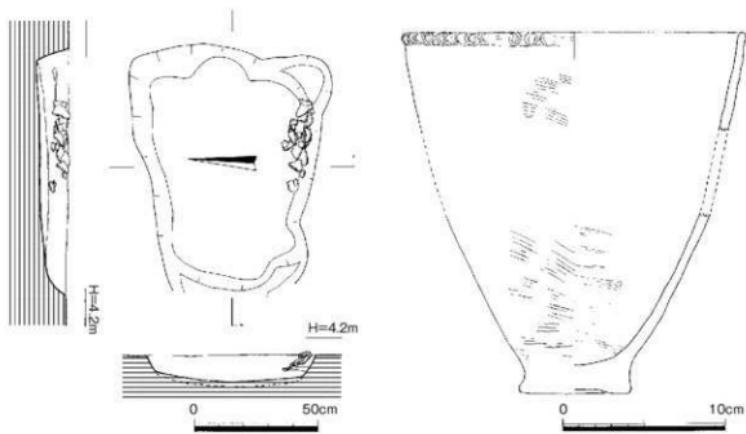
SK062 (第13図) 調査区東部に位置する円形に近い形状の土坑。堀方は長軸1.73m、短軸1.56mで、深さは12cmで非常に浅い。遺物（第15図11～18）は、11～13が弥生前期の高環の口縁で、11は外面上部分的に赤色顔料が残存する。14・15・16は壺の小片で14は刻目突帯をもつ。17は弥生中期前半の壺の口縁で、18は弥生前期の壺の底部。また黒曜石の剝片2点が出土した。



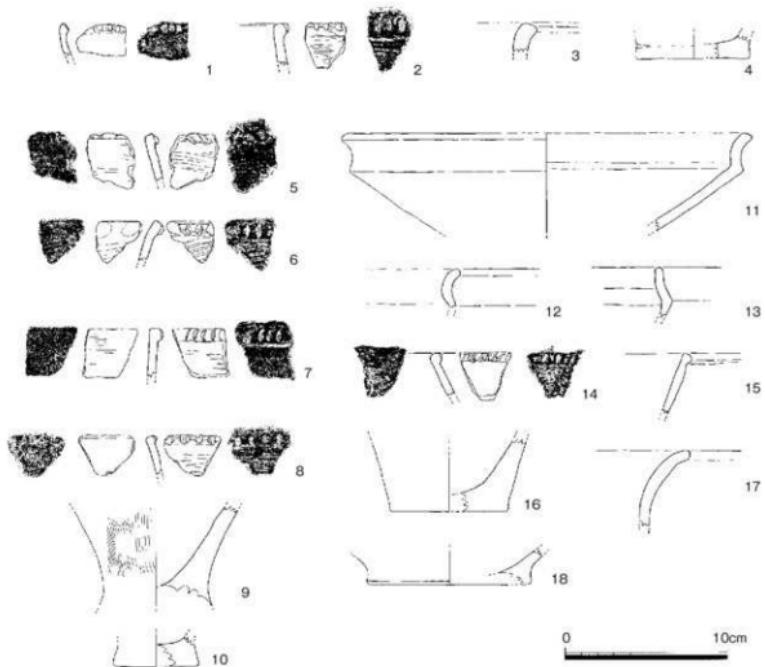
第12図 SD046実測図 (1/40)



第13図 各土坑実測図 (1/40)



第14図 SK047及び出土遺物実測図 (1/20, 1/3)



第15図 土坑出土遺物実測図 (1/3)

### 3) 自然窪地

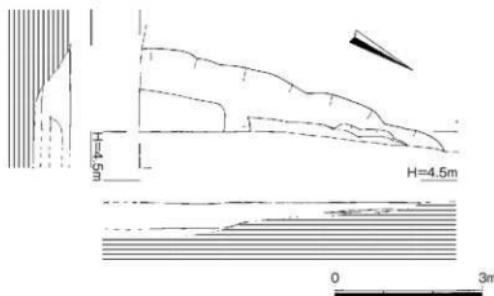
SW001 (第16図、写真22・23)

調査区東隅に位置する自然窪地である。位置から見て第12次調査区南東部で確認されたSW007の一部で、調査区外東側に大きく広がるものと考えられる。今回の調査で確認できた部分は、南東-北西方向に6.25m、南西-北東方向に1.7mを測り、かなりの大きさで広がる窪地であったことが分かる。深さは75cmを測り、地山下層の砂層に達している。掘削中はその砂層からの湧水が絶えなかった。埋土は黒灰色粘質土である。

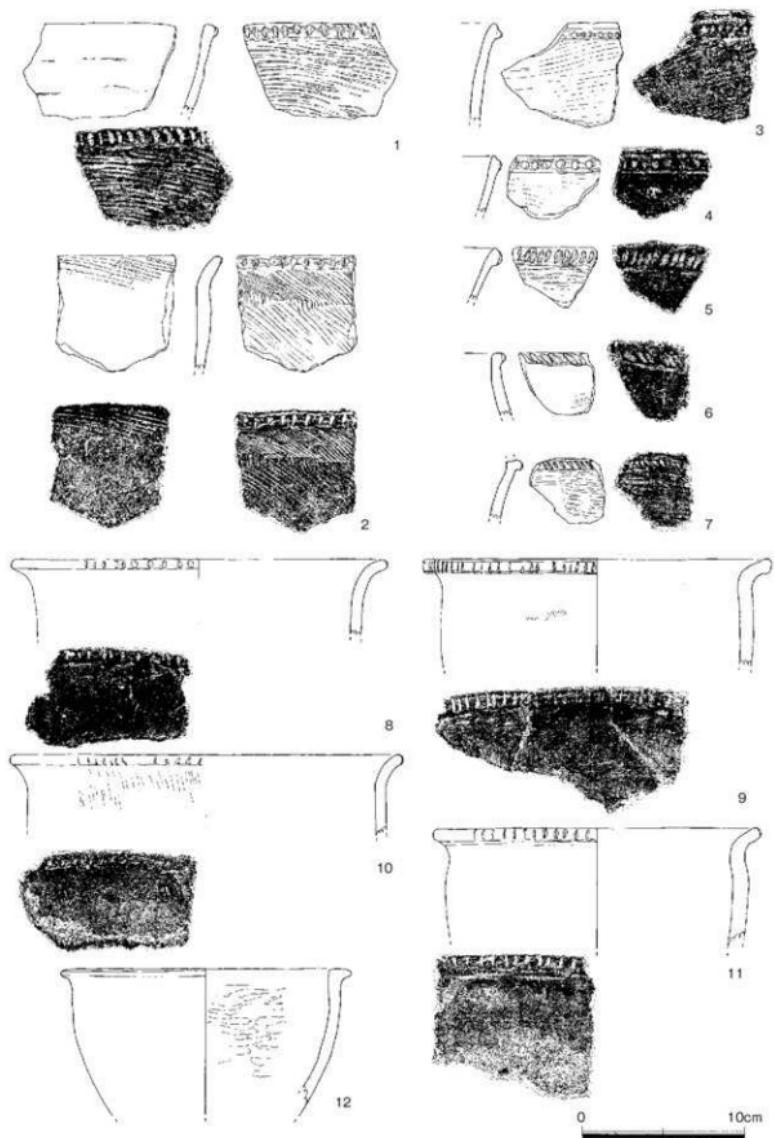
出土遺物（第17~19図）

1~12・14・15は甕の口縁である。1~11は弥生時代前期に属する。1は口縁部端に深い刻目をもつ突帯が廻り、外面に条痕を施す。また内面に粘土紐の接合痕が看取でき、内傾接合である。2は口縁部端にやや浅めの刻目をもち、外面から口縁部内面にかけて条痕様の刷毛目を右下から左上の方向に施す。口縁部外面は横方向のナデで仕上げる。3は口縁部端からやや下に浅い刻目を持つ突帯を貼り付ける。外面には条痕が看取され、内面には粘土紐の接合痕が残る。4もまた口縁部下に刻目突帯を廻らすが、器面が荒れて調整は看取できなかった。5・6は口縁部端に刻目突帯を貼り付け、外面に条痕を施す。7は口縁部下の部分で、刻目突帯が廻り外面に条痕を施す。8・10・11は如意形口縁の端部に浅い刻目をもつ。8は口縁部外面に横方向、胴部に縱方向のナデを施す。復元した口径は8が23cm、10が24cm、11が20cm。9は如意形口縁の平坦な端部に浅い刻目をもつ。外面には横方向のナデが看取できる。復元した口径は21.2cm。12はL字形の口縁をもつ。弥生時代中期初頭のものか。14・15は弥生時代中期のもので胴部に縱刷毛、口縁部外面から内面にかけて横方向のナデを施す。28~32は甕の底部片である。28は外面に縱方向のミガキを施しており、内面には刷毛目がみられる。底面に何らかの種子と考えられる圧痕があり、内部には格子目上の痕が残る。29は底面からやや強く上方に立ち上がる。底面には焼成後に形成されたとみられる穿孔部があり、復元径2.4cmを測る。内外面に横方向のミガキを施す。復元した底径6.4cm。30はわずかに上げ底になり、底部は窄まる。外面に縱刷毛を施す。底径6.8cm。31は底部外面に接合痕が看取でき、円形の粘土板を底として粘土紐を積み上げ成形されたことが分かる。外面に条痕、内面にナデを施す。底径7cm。32は胴部から窄まつたのち一度外反し、内側に屈曲して底面へ至る。外面に縱刷毛を施す。底面は平坦で径9.0cm。

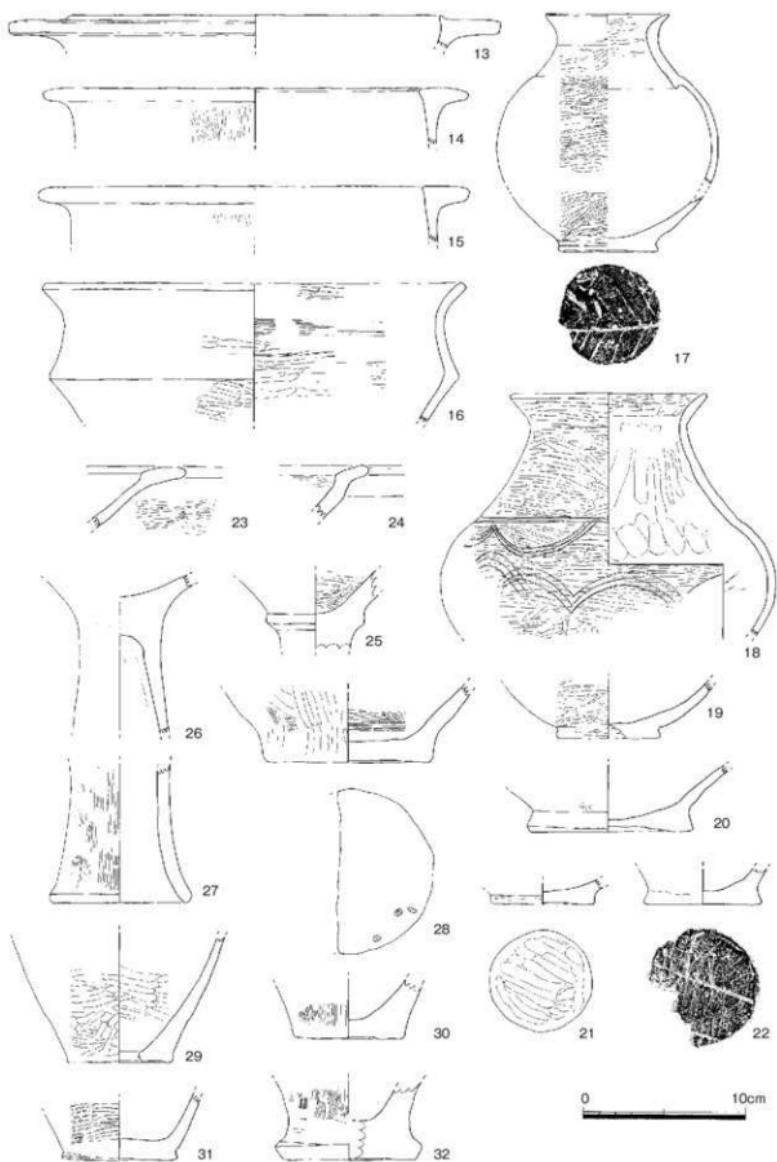
16~23~26は弥生時代の高坏。16は口縁部片で、頭部から外反気味に開いて強く立ち上がり、口縁部下で内側に強く屈曲したのち再び外反して口縁に至る。器面は磨耗している。内外面に横方向のミガキが看取され、口縁部内面には横方向の刷毛目を施す。復元した口径は26cm。弥生時代前期のものか。23・24は口縁部片で、ともに内側に段をもつ。24は口縁部下に屈曲部をもち、外反しつつ立ち上がる。25・26は頸部片。25は坏部との境に断面三角の突帯を貼り付けており、口縁部に向けてやや強く立ち上がる。内面には横方向のミガキが看取できる。弥生時代前期のものと考えられる。26は頸部から口縁部に向けて緩やかに開き、頸部から脚部へは細く延びる。器面は磨耗が激しい。



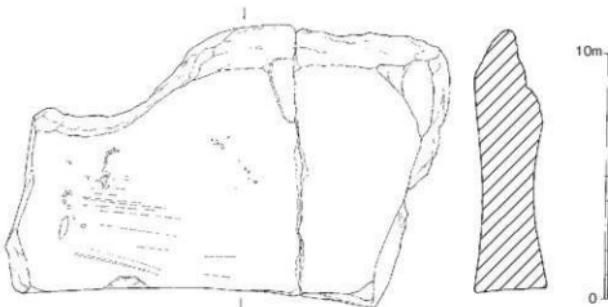
第16図 SW001実測図 (1/100)



第17図 SW001出土遺物実測図 1 (1/3)



第18図 SW001出土遺物実測図2 (1/3)

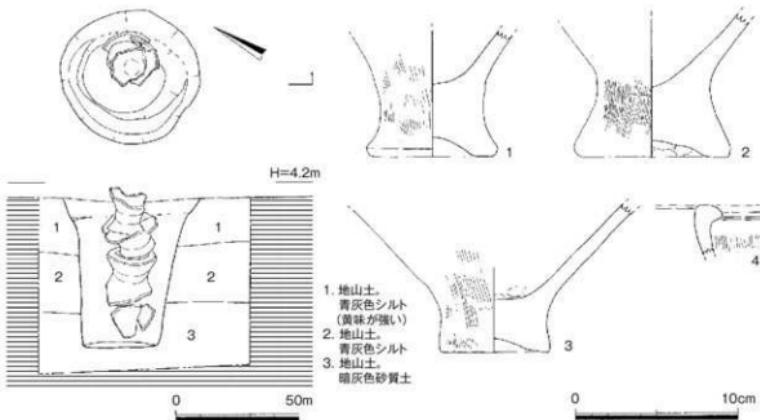


第19図 SW001出土遺物実測図3 (1/2)

13・17~22・28は弥生土器の壺である。13は弥生時代中期の壺の口縁部片で、口縁内側の縁がわずかに上方にせり出している。器面には赤色顔料を塗布した痕跡がみられ、内外面ともに横方向のナデ・ミガキが丁寧に施されている。復元した口径は30cmである。17は小型の壺で、底面には葉脈の痕跡が残る。底部は一度内側に窄まつたのちに弧を描いて球状の胴部に至り、肩部と頸部の境には段をもってそのまま窄まり、外反して口縁に至る。内面でも頸部と胴部の境には接合時の段が確認でき、両部分をユビオサエによって接着している。頸部内面には粘土紐の接合痕がみられ、内傾接合であることが分かる。口縁部内面から外面全体にかけては赤色顔料の痕跡と横方向のミガキが確認できた。ミガキは底面に至るまで丁寧に施されている。胎土は精緻でやや黄味を帯びた灰白色を呈し、胴部下半は黒色化する。底径は6.1cmで、復元して器高14.5cm、口径7.6cm。18は口縁部から胴部にかけての破片で、やや張った肩部と頸部の境には段を有し、口縁部に向けて窄まつたのちに外半し、境にわずかな段を持って口縁部端に至る。頸部の肩部との境には2条の沈線が廻り、その下に3条の沈線からなる弧状文を上下に施す。口縁部内面から外面全体にかけては赤色顔料の痕跡と横方向のミガキが看取される。頸部内面には上方へ向かって継ぎのユビナデを施す。胎土は灰黄色で、胴部外面は一部やや黒ずんでいる。復元した口径12.0cm、残存高14.8cmを測る。19~22は壺の底部片。19は小型壺の底部片で、底面含め外面にミガキを施す。内面は刷毛状工具によるナデ調整が看取できる。胎土は精緻で黄味を帯びた灰白色を呈し、一部黒色化する。復元した底径は6.3cm。20は器面の摩滅がひどい。胎土に砂粒が多く含まれ、底径は10.2cm。21は小型の壺で、底面・外面にミガキがみられる。胎土にはやや砂粒が含まれる、底径6.3cm。22は底面に葉脈の痕跡がみられ、その上に小さな刷毛状工具によるナデが数条看取される。内面にはナデを施す。底径7.2cm。

27は円筒形の土製支脚。外面には丁寧な縦刷毛が施され、内面は縦方向のナデと、縁部に横方向のナデがみられる。内外面に赤色顔料の痕跡が残る。器壁の最大厚は0.9cmで、底径は8.7cm。

また、シルト岩製の砥石が1点出土した(第19図)。表裏両面と側面1面の計3面が磨み、砥面として用いたことが分かる。表には線状の使用痕が数条と、暗青灰色の金属質の付着物が看取される。長さ18.2cm、最大幅11.5cm、最大厚3.2cm。他、少量の黒曜石の小石核・剥片や、滑石の小原石1点が出土している。

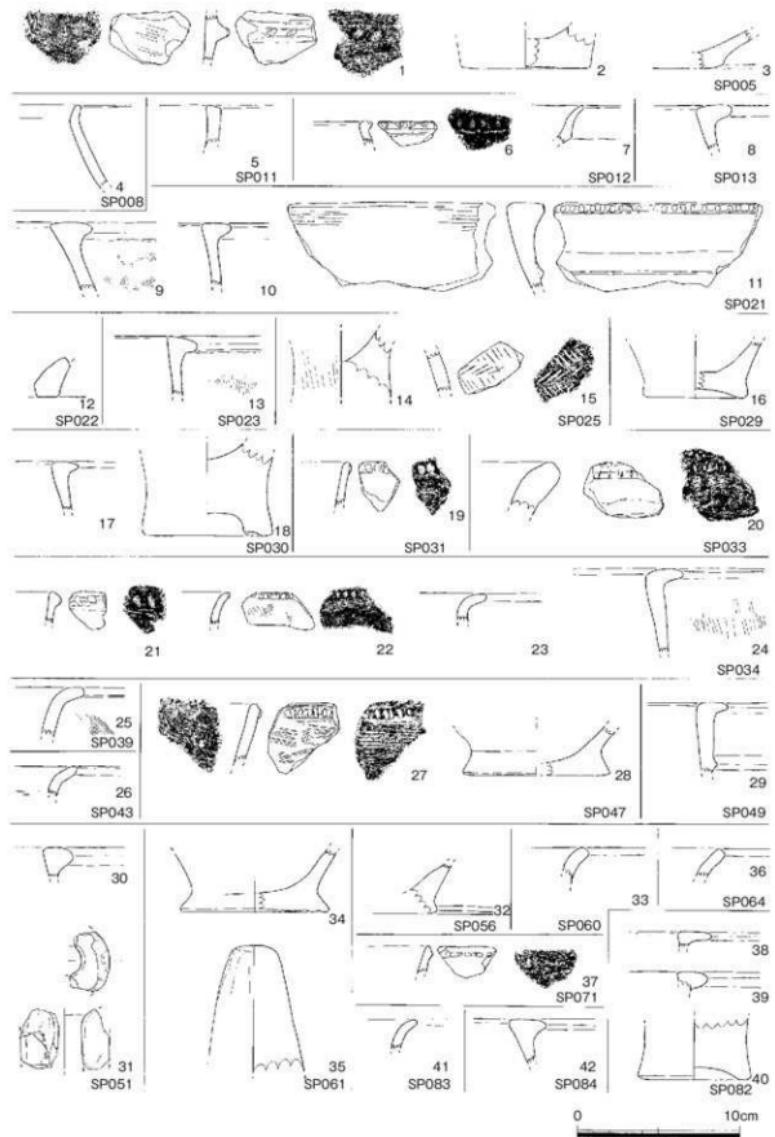


第20図 SP018及び出土遺物実測図 (1/20, 1/3)

#### 4) ピット

SP018 (第20図、写真25) 調査区南端部に位置し、堀方の径28cm、深さ31cmの円形のピットである。形状・大きさ共に他のピットと変わらず特筆すべき特徴はないが、その内部から弥生時代中期初頭の壺の底部が積み重なって出土している。これらは明らかに人為的な配置によるものと考えられ、その出土状況を記録した。出土した土器自体はいざれも一般的な日常土器の破片であり、この配置が祭祀的な意味をもった行為の結果か否かは不明である。1～4は弥生土器の壺である。全て弥生時代中期初頭のものである。1～3は外反した底部をもち、上げ底のもので、外面は縦刷毛を施し、内面はナデを施している。1は最上のもので、2は2段目のものである。2は図中最下部の土器片2点と接合した。3は上から3段目に配置されたものである。その他、4の口縁部小片が出土した。外面に縦刷毛を施し、口縁部から内面にかけてナデを施す。また黒曜石小片1点が出土している。

その他のピット出土土器（第21図）1～3はSP005出土。1は壺の胴部で刻目の施された突帯をもつ。2は壺の底部でわずかに上げ底になる。3は壺の底部。4はSP008出土の壺の口縁。5はSP011出土。壺の口縁か。6・7はSP012出土。6は壺の口縁で、7は高坏の口縁。8はSP013出土の壺の口縁。9～11はSP021出土の壺の口縁。11は口縁部端に刻目をもち、下に三角突帯が廻る。12はSP022出土の壺の底部。13はSP023出土の壺の口縁。14・15はSP025出土。14は壺の底部。15は壺の胴部で無軸の羽状文を刻む。16はSP029出土の壺の底部。17・18はSP030出土。17は壺の口縁。18は壺の底部で上げ底になる。19はSP031出土の壺の口縁。20はSP033出土の壺の口縁で外側と上端に刻目をもつ。21～24はSP034出土の壺の口縁。21・22は口縁部端に刻目をもつ。25はSP039出土の壺の口縁。26はSP043出土の壺の口縁。27・28はSP047出土。27は壺の口縁で刻目突帯をもち外面に条痕を施す。28は壺の底部。29はSP049出土の壺の口縁で三角突帯が廻る。30・31はSP051出土。30は壺の口縁。31は不明土製品で、筒状を呈する。32はSP056出土の壺の底部。33はSP060出土。34・35はSP061出土。34は壺の底部。35は土製支脚か。36はSP064出土。37はSP071出土。38～40はSP082出土。40は壺の底部で上げ底になる。41はSP083出土。42はSP084出土の壺の口縁である。他、5cmに満たない黒曜石の小石核や剥片・チップが少量出土した。



第21図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

## IV. おわりに

今回の発掘調査では第1遺構面で古代～中世の水田跡、第2遺構面で弥生時代前期～中期前半に属する溝3条と土坑7基・土器埋納ビットを含む多数のビット状遺構を確認した。また、第2遺構面直上には厚さ約20cmの弥生時代前期～中期前半の遺物を多く含む包含層が堆積していた。

雀居遺跡第14次調査区においては、弥生時代の前期には川砂上に堆積した淡青灰色シルト・粘土上に集落が営まれていたようで、今回掘立柱建物を検出するには至らなかったものの、弥生時代前期～中期初頭の多数のビット状遺構を調査区全体から検出した。中には柱根が残るものもあり、何らかの生活施設が存在していたことは明らかである。

当時の雀居遺跡一帯の地形は島状に連なる微高地と低湿地で構成されており、本調査区はちょうどその境界部分にある。調査区東端では地形がシルト下の砂層まで落ち込んでおり、自然の窪地SW001となっている。窪地内には黒褐色粘質土が堆積し、低湿地に類する環境であったことが窺える。それに正対して調査区の西端では淡青灰色シルトは検出できず、下層の、鉄分が沈着した赤褐色砂が露出していた。これらのことから、第14次調査区で確認できた集落の主体は、当該地点からやや北西の現調整池側の微高地中心部に向かって広がっていたことが想定される。

出土遺物からみたところ、この状況は弥生時代中期前半まで継続するようである。しかしながら中期中頃以降については遺物がほぼ無く、集落經營の断絶あるいは縮小・周辺の他微高地への移動があつたものと考えられる。また、直上に堆積した遺物包含層については、遺物の出土分布や個々の状態から、水成の二次堆積によるものと判断した。

長い遺構の断絶期を置き、古代～中世になると条里制に沿った地割りに基づき、大規模な水田の經營が始まる。水田面では遺物はほとんど出土せず、一定の方向に走る畦畔や水田内の足跡を確認した。その後、もともと弥生時代に地形が落ち込んでいた調査区東側が、おそらくは御笠川の氾濫に伴って洪水の流路となり、あふれ出た洪水砂によって水田が埋没したと考えられる。

福岡空港周辺地域は近年に至って福岡空港が敷設されるまでもともと広範な田園地帯であった。環境的な条件が良いこと也有ったのか、この地域においては古代～中世から、時に御笠川の氾濫に悩まされながら連绵と水田の經營が行われていたことが想定されるのである。



写真1 第14次調査区周辺状況（北西から）



写真2 第14次調査区周辺状況（北から）



写真3 第14次調査区周辺状況（北東から）



写真4 第14次調査区周辺状況（東から）



写真5 第14次調査区周辺状況（南東から）



写真6 第14次調査区周辺状況（南から）



写真7 第14次調査区周辺状況（南西から）



写真8 発掘作業風景（東から）

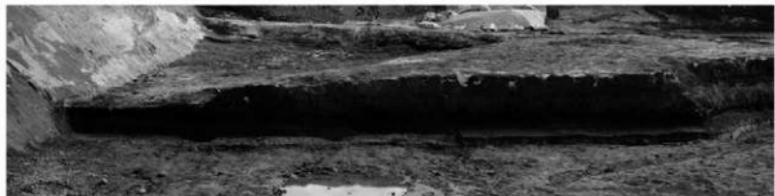


写真9 第14次調査区基本層序（北西から）



写真10 第1面全景（西から）



写真11 畦畔土層断面（南東から）



写真12 畦畔と足跡（東から）



写真13 杭1（北東から）



写真14 杭2・3（北東から）



写真15 第2面全景（南西から）



写真16 第2面南西部（西から）



写真17 SD046・SK045・047完掘状況（南から）

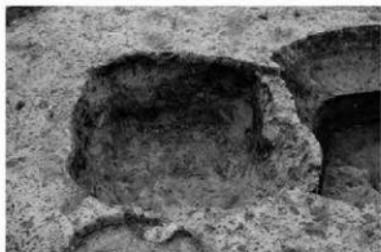


写真18 SK015完掘状況（南から）



写真19 SK016完掘状況（南から）

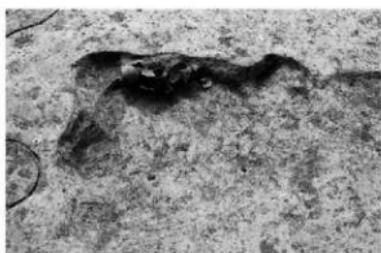


写真20 SK047（北から）



写真21 SK047土器出土状況（北から）



写真22 SW001（西から）



写真23 SW001土層断面（北西から）



写真25 SP018土器出土状況（南から）



写真24 柱根が残るビット（東から）

## 報告書抄録

ふりがな	ふくおかくうこうせいびじょうにともなうまいぞうぶんかざいちょうさはうこく ささいじゅう							
書名	福岡空港整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 雀居10							
副書名	一雀居遺跡第14次調査報告一							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1281集							
編著者名	細石朋希 井上蘭子							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号							
発行年月日	2016年3月25日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
雀居遺跡	福岡県福岡市 博多区 大字雀居	40130	2633	33° 34' 48"	130° 26' 48"	2015.1.19 ~2015.3.20	575m <sup>2</sup>	第2 ASR・ SSR建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
雀居遺跡	集落 水田	弥生時代・ 古代・中世	水田	畦畔	溝	土坑	弥生土器・石器	
要約	<p>雀居遺跡は福岡平野を北流する御笠川東岸、シルト質土の沖積微高地に立地する。周辺には東側の月隈丘陵や西側の那珂・北恵台地上に遺跡が高い密度で分布し、雀居遺跡はこれらに挟まれた平野部の中央に位置する。第14次調査区は雀居遺跡の南西部にあり、北西側約2/3は第12次調査区の西部と重複している。今回新たに着手した南東側の区画では暗青灰色粘土上に展開する、1条の畦畔を伴った水田跡が確認できた。時期を比定し得る遺物は出土しなかったが、12次調査の結果を踏まえ古代～中世に属するものと推定した。標高は約4.9mで、水田東部は後世の洪水によって削られ、砂層が厚く堆積していた。水田面下には枝等の自然の木質を含む黒褐色粘土質、弥生土器・黒曜石を含む灰褐色粘土の遺物包含層が堆積する。北西側の区画は前回未着手のこの包含層から調査を開始し、包含層下の青灰色シルト層上面で弥生時代前期～中期初頭を中心とした遺構を検出したが密度は薄い。標高は約4.15mである。溝3条、土坑7基、ピット状遺構が確認できた。調査区東端には深さ80cm程の自然の窪地があり、板付II式の壺が出土した。また土坑からは刻目突唇文土器も出土している。その他、弥生時代中期初頭の壺の底部片を積み重ねた土器堆納ピットが1基確認できた。溝はいずれも深さ10cm以下で一部途切れ消滅する。出土遺物は弥生土器、土製投弾、石庖丁・石斧、敲石、紡錘車、黒曜石がある。本調査区は弥生時代前期～中期前半において福岡空港南部に位置する微高地の縁辺にあたり、集落の縁辺部であったことが想定できる。</p>							

### 福岡空港整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

## ささ い 雀居 10

一雀居遺跡第14次調査報告一  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1281集

2016年（平成28年）3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目1番8号

印刷 魚住印刷  
福岡市博多区大博町8-20



